

朝起きてみると、体が重たくて何もする元気がない。昨晚もほとんど眠れなかった。二晩続けて眠れなかったせいとはわかっているけど、疲労困憊で体も気力も萎えている。腫れた両眼が重たくて開けているのも難儀なほど、首筋から肩にかけては、いつもの凝りがもつと酷くなつて岩のようだし、腰が重たいのは嫌な兆候だ。それに何でも足の筋肉が痛いのだろう……考えてみたら、一昨日の朝、あれだけ全速力で走ったことをわすれていた。思わず、ひとり苦笑した。

昨晚、ピートが持ち帰つてきてくれた十二日の新聞に目を通す。「デイリー・ニューズ」紙は一面に、燃える北タワーの横を次のハイジャック機が南タワーへ向かつているカラー写真を載せ「これは戦争だ」と大きな見出し。「ニューヨーク・タイムズ」紙は黒い煙を吐く北タワーの隣で爆発する南タワーのカラー写真を掲載し、「アメリカは攻撃された」と謳っている。「ワシントン・ポスト」紙は燃えるタワーと破壊され炎上するペンタゴンの両方の写真を使っていた。

続けて「ワシントン・ポスト」紙をめくっているうち、わたしはA八面の大きなモノクロ写真に目を奪われた。望遠レンズは北タワーの窓から身を乗り出している人びとの姿を写し出しているのだった。それも、たくさんの人が鈴なりのように外壁にすがりつき、ほとんど飛び降りんばかりの姿勢でいる。灰色の煙が太い筋となつて左右を貫いている。外壁から手を離れた瞬間のように見える人もいる。

ベッシー・ストリートから見上げていた時、肉眼では見えなかったが、タワーからはやはりこんなにかくさんの人が逃げ出そうとしていたのだ。彼らのいる階は火の勢いが余りにも強くて非常階段に向かうこともできず、煙で内部は何も見えず、とりあえず呼吸するために窓へ出てくるしかなかったに違いない。

あの時、タワーに閉じ込められた人たちは、どれほどわたしの立つ地面へ戻りたいと切望し、どれほどの恐怖に襲われ、どれほどの絶望感に苛まれていることか、と思つて神にも祈りたい気持ちだった。彼らの最後の姿を見つめれば見つめるほど、わたしは無力感に襲われた。テロに対して怒る気力もなくなり、ただひたすら虚しい。

「そういうえば昨晚、グリニッチ・ヴィレッジを歩いていたら、十一丁目の小さな消防署に花とキャンドルが灯されていた……あそこの消防士は全滅したらしい」新聞から目を離すとピートがこう言った。十四年前に結婚した当時、わたしは古いアパートを借りていた。十丁目に面した入り口に鉄柵の門があるアパートで、建てられたのは一八四八年。当時、五番街にあったブレヴール・ホテルのバスケットウエイターの宿舎だったという。ここにはセオドア・ドライザーほか多くの作

家が住み、ジョン・リードも身を寄せていた時期があったという。あのアパートの鉄柵を越えて一ブロック先に赤いペンキに覆われた小さな消防署があったことはよく覚えている。あそこの消防署から貿易センタービルまでは、七番街を下りてウエスト・ブロードウェイに入れば、ほんの五分もかからないだろう。彼らはおそらくいちばんに駆けつけた消防隊員だったに違いない。

テレビではジュリアーニ市長と。パタキ州知事が記者会見を行っていた。十四丁目以南の閉鎖は本日まで、明日からチャンネル・ストリート以南が閉鎖になると発表している。

「これまでに発見された遺体は九十四体。そのうち四十六遺体の身元が確認されました。そのほか、七十に及ぶ遺体の一部が発見されています」

とジュリアーニ市長。

「サリンによるテロの可能性は？」

記者の質問が続く。

「その可能性がないとはいえませんが」

市長は明確な答えを避けて記者会見を終わらせた。

*お座りをした警察犬

わたしは仕事部屋へ入ってインターネットに繋ぎ、Eメールをチェックしてみた。ペンタゴンの友人は出張中で難を逃れたという。それも国防総省ビルにジェット機が突っ込んだ時には、オマハへ向かっていたという。オマハというのは、行方不明だった大統領がたどり着いたネブラスカ州オマハにあるオフット空軍基地に違いない。核攻撃を行う時のコマンドポストであるこの基地へ彼が向かっている時、大統領も同じ基地を目指していた。帰りは軍用機に乗れたという。ワシントンへ帰ってからは自宅に帰れず、ずっとオフィスに詰めている、と記している。ペンタゴンのオフィスがそのまま使えるのだろうか。

友人のヴァレリーは夫スティーブの無事を伝えてきた。数年前までニューヨークに住んでいた彼らは、九月三日の「レイバー・デイ(労働者休日)」にヴァージニアから引越して来たばかりだった。断るにはもつたいないほど良い条件の仕事にスティーブが誘われたから、ニューヨークへ戻ることに決めた、というメールが一カ月ほど前に届いたばかりだった。投資銀行関係の新しい職場が貿易センタービルではなかったかと心配したが、幸運なことにミッドタウン(四十二丁目から五十九丁目まで)だと知らせてくれた。

「ウオー・ゾーンからの速報」メールの返事もたくさん入っていた。郊外のウエストチェスター郡に住む高校時代の同級生は、彼女が教えている生け花と料理教室の生徒のうち、四人のご主人が行方不明です、と書き送ってくれた。メールは

こう続いている。

「ほかに息子の友達がその日に限ってWTC一号館の百六階で会議があつて出席していたようです。もちろん、彼も帰ってきていません。こんなことが許されて良いものかと憤りを感じます」

マンハッタン東七十九丁目に住む友人からは、今日(十二日)は拙宅まで南風で煙が北上し咽喉が痛かったです、と知らせてくれた。昨日はうちのアパートのなかでも匂いがした。エアコンの通気孔が開いていたのに気付かず、すっかり外の空気を取り入れてしまったせいだと思っていたが、南風にのってマンハッタン島全体に煙が流れたらしい。

「エンパイア・ステート・ビルとペン・ステーションが今度は緊急避難になつたと聞いて、エンパイア・ステート・ビルの足元に住んでいるわれわれも慌てていきます。多分、噂でしょうが」

こう書き送ってくれたのは、日本のデザイナーのアメリカ代表を務める友人。昨晩、ひとりでテレビを見ていたら、「フォックス・テレビ・ニュース」がエンパイア・ステート・ビル付近からの生中継を報道していた。爆弾予告が入つたので、全員、緊急避難になつたとキャスターがマイクを手に報告。詳細はわからない状況だが、警察犬がビルに入り、

「お座りをしました」
とリポーターは真面目な顔で伝えていた。

「警察犬は危険を察知すると、お座りをするよう訓練されているのです。しかし、犬もこの二日間で疲れていますから、ただ座ってしまったのかもしれない」

この状況で、もし、エンパイア・ステート・ビルも爆破されたりしたら、ニューヨーク市内はパニック状態に陥るだろう。他のチャンネルにまわしてみると、エンパイア・ステート・ビルについては報道していなかった。

わたしは一九九六年のアトランタ・オリンピックを思い出した。あの時、TBSの仕事でアトランタへ出かける用意をしていると、ケネディ空港発。パリ行きのトランス・ワールド航空(TWA)八〇〇便が発直後に爆発、乗客は全員死亡した。わたしはオリンピック開催に合わせ、翌七月十八日、ラガーディア空港からアトランタ行き便に乗った。空港の警備はいつになく厳重だった。アトランタへ着いてみると、空港ばかりでなく、市内随所の警備態勢はまるで戒厳令下だった。

TBSが手配してくれたので、わたしもオリンピック委員会発行の記者証をもらい首から下げていたが、テレビ局の事務所がある本部建物へ入るのもたいへんな騒ぎだった。パスポートと運転免許証、記者証を見せてようやく入れてもらえるのである。開会式が無事終わった数日後、わたしは本部建物に入ろうとして制止された。爆弾予告があつたというのだ。他の場所にも爆弾予告はあつたらしく、

そんな話をいくつか耳にした。しかし、「アトランタ・ジャーナル」など地元各紙は、爆弾予告について何も報道していなかったのである。新聞の締切前にただの嫌がらせだったことがはつきりしたのかもしれない。しかし、そんな予告がたくさん届いていることも報じていなかった。明らかに選手や関係者、観客などの動揺を避けるための報道規制だった。おかしいことに、日本のスポーツ紙だけが、大きな見出しで「各所に爆弾予告」と報道していたのには苦笑してしまった。

しかし、わたしがニューヨークへ帰った四日後の七月二十七日深夜一時頃、アトランタ五輪百周年記念公園で死者二名、負傷者百十名を出す爆弾テロ事件が起こったのである。

あの時のアトランタ同様、ニューヨークのテレビ局は爆弾予告について報道規制したのだろう。友人がEメールで知らせてくれたようにペン・ステーションでも緊急避難があったとは、わたしも知らなかった。誰が面白がってそんな電話をいれるのだろうか、あるいはテロリストの仲間が意図的にやっている嫌がらせだろうか。あるいは、爆弾テロがまだ続くのだろうか。

*キャサリーンの話

その時、キャサリーンから電話がかかってきた。大丈夫だろうとは思っていても、ピートは連絡の取れなくなつた妹のことを気にかけていた。

「昨日の午後ようやく帰宅できたの。二十六時間かかったわ」

いつもの快活な声。ピートは七人兄弟のいちばん上で、五人の弟をもつ。三番目のキャサリーンはたったひとりの妹になる。北アイルランドのベルファストから移民してきたピートの両親はふたりとも存命ではない。わたしは義理の父に会う機会がなかったが、義理の母は四年前、八十七歳で亡くなった。母親譲りの金髪とブルーの瞳を受け継いだのは、ピート、キャサリーン、いちばん下のジョーだけ。一九四〇年生まれのカササリーンまでが戦前生まれになる。

十二日の朝、キャサリーンはスタテン島からバスで貿易センタービル前に着き、いつものように地下一階で買い物を買ませると、7時10分のパストレインに乗ったという。彼女は保険関連サービスの会社で働き、五カ月前までは、WTC七号館に勤務していた。好景気でマンハッタンの不動産が軒並み値上がりすると、オフィスはハドソン河対岸のニュージャージー州に新しく開発されたニューポート・プラザに建つ高層ビルの二十階に移転した。パストレインに乗ると、たった十分でニューポート・プラザ駅に着く。

「オフィスに着いてから自分の机で朝食を済ませた後、誰かと話している時、ビルが揺さぶられる物凄いショックを受けたの。窓はハドソン河に面していて、快晴の空にトレード・センター一号館のタワーが燃えているのが見えたわ。みんな

窓に寄り添ってラジオでニュースを確かめようとしながら、向こう岸を見つめていると、黒い大きな飛行機が飛んできて二号館のタワーにぶち当たった。全員が大声を上げ、泣き出す声も聞こえた。テロだというのは、すぐにわかったわね。一緒に働く人たちのなかには、九三年の爆破事件を体験した人も多かったから。すぐ緊急避難せよ、という指令が出て、非常階段を下りていったんだわ」

高層ビルから通りに出たキャサリーンは、パストレインが止まったからマンハッタンに戻るのとは不可能と聞かされ、クルマもないし、どうしたら良いか途方に暮れたという。

「誰かスタテン島に帰る人はいませんか？」

通りで叫んでみると、同じビルから出てきた女性が一緒にクルマに乗るよう誘ってくれた。見ず知らずの女性のクルマに乗ると、ほかに知らない女性二人も同乗することになった。四人はニュージャージーとスタテン島を結ぶガースルズ橋まで辿り着いたが、橋は通行禁止になっていた。家にも帰れない、どうしたものかと思ひ悩んだ。四人のうちひとりの若い女性は妊娠五カ月で、すっかり取り乱していた。

「その時、ハドソン河の向こう岸を見ると、タワーが崩れ落ちていくのが手に取るように見渡せたのよ。全員が大声で泣き叫んで、しばらくするとみんな手を合わせて神に祈ったわ」

橋に至る道はインターハイウェイ二七八号線である。たくさんのクルマで前にも後にも進めなくなった。そこで、次のタワーの崩壊も目撃したという。

「クルマのなかについて、これが核戦争なのか、何なのか全くわからなかった。そんな状態だったの」

キャサリーンは四人のうちニュージャージーに住む女性の家へ向かい、そこで昼食をご馳走になり、午後遅くなつてからようやく夫と電話で話すことができたという。しかし、ニュージャージーからスタテン島へ帰ることは不可能だったので、その晩は見ず知らずのその女性の家に泊めてもらった、と続けた。

「うちのマーク（息子）の友達のなかには消防士になった青年が多いから、何人か行方不明になっているわ。マークも初めて勤めたところは、カンター・フィッツジェラルドだったのよ。あの日、彼も現場近くで働いていたけど、無事だった。嫁のジェシカは初めの飛行機が突っ込んだ直後、近くのレクター駅から地下鉄に乗って八丁目駅まで行ったというから、多分、最後に運行していた地下鉄だったのでしょうね。会社の人も家族もみんな無事で良かったわ。もし、わたしが少し遅れてトレード・センターに着いていたら、と思うと……あの黒い大きな飛行機のことを瞼に焼きついて、飛行機の音が聞こえるだけでまだ身震いがするし、もうトンネルは通りたくないわ」

キャサリーンが話していた「カンター・フィッツジェラルド」というのはWT

C一号館の百一階と百三階から百五階までの四フロアを使っていた財務省債券を扱う投資会社で、社員千名のうち六百八十名以上が行方不明になっている。アメリカン航空一一便は北タワーの九十六階から百三階の間にまっすぐ激突したため「カンター・フィッツジェラルド」は一企業として最大の被害を出した。

北タワーにぶつかったアメリカン航空一一便も南タワーを襲ったユナイテッド航空一七五便もともにボーイング767型機。「サンフランシスコ・クロニクル」紙によると、機体の左右の長さは一五九フィート二インチ(約四八・五メートル)、貿易センタービルの側面より少し短く、ちょうど建物にすっぽり入り込む形で激突、爆発している。

アメリカン航空機は北側から激突した。次のユナイテッド航空機はこれを見て、回り込むような形で南東側から突っ込んでいく。両旅客機ともロサンゼルスを目指していたので、西海岸に届くまでの十分な航空燃料を積み込んでいた。ボーイング767型機が搭載できる最大燃料は一万三千九百ガロン(「サンフランシスコ・クロニクル」紙)というから、目いっぱいでないにしても一万ガロン程度の航空燃料を積んだジェット機が炎上すれば、建物が崩壊するのは不思議ではない。しかし、爆発、崩壊のあの時点では何が起こったか、誰にも全くわからなかった。キャサリンのように核戦争だと思っただとしても、すべてを目撃していれば、それくらいの強烈なインパクトは当然あっただろう。

*ペンシルベニアに墜落した機

トレード・センターとペンタゴンに激突した三機は無理としても、ペンシルベニアに墜落したユナイテッド九三便のブラックボックスの発見に期待がかけられていた。ユナイテッド九三便は墜落した時、余りにも急降下だったので、地表から八フィート(約二・四メートル)ももぐって爆発、炎上したという。その深い穴のなかから、ブラックボックスが発見されたい。この旅客機がペンシルベニアで墜落したのは、機内の乗客がテロリストと闘ったためであることが明らかになった。搭乗していた夫と携帯電話で話した夫人がテレビ・インタビューに答えていた。

乗客のジェレミー・グリック(三十一歳)はニュージャージー州ウエスト・ミルフォードの自宅に電話して、搭乗機がハイジャックされたこと、三人のテロリストは赤いヘッドバンドをしたアラブ系で、ナイフを振り回していると妻のリズベスに伝えた。テロリストは爆弾だという箱で乗客を脅し、旅客機をワシントン方向へ旋回させていた。リズベスはその電話を緊急時の九一一に繋げ、三人が同時に会話できるようにした。九一一のオペレーターは他の二機がハイジャックされ、貿易センタービルに激突したところだと知らせた。

これを聞いたグリックは、テロリストの意図をはつきりつかんだ。数分間、電話から離れたグリックは、ほかの乗客と相談すると、妻に最後の言葉を伝えた。

「君と娘を愛しているよ……彼はこういうとそれから戦いに挑んだのです。彼のアドレナリンはとても高かった。すごく早口で話していましたから」

リズベス・グリックの口調は実にしつかりしている。

もうひとりの乗客トム・バーネット（三十八歳）も妻に電話して、ひとりの乗客がすでに刺されて殺された、と伝えた。

「わたしは彼に静かに座って何もしないで、と頼んだのです。でも、彼はノーと言いました。彼は、ハニー、愛しているよ、と最後に言ったのです。飛行機がどこか重要建築物に突っ込もうとしていることはわかっていました。夫も同じです。どなたと一緒に闘ったかわかりませんが、夫たちはたくさんの方の命を救ったのです」

ディーナ・バーネットはこう言って、涙を流した。

「わたしは彼を本当に誇りに思います」

もうひとりの乗客は、マーク・ビンググハム（二十一歳）。彼は大学時代ラグビーチームのスターで、強盗を組み倒したこともある根っからの闘士だったという。

サンフランシスコに向け、ニューアーク飛行場を発ったユナイテッド九三便は、ハイジャックされてからテロリストの誘導ミサイルとなって、ホワイトハウスか国会議事堂を狙っていたと言われる。

テレビが映し出した写真を見ると、闘った三人はともに背が高くスポーツで鍛えた頑強な体躯の三十代だった。電話の後でどんな闘いが機内で起こったのだろうか。全員死亡した今となっては、想像もつかない。

乗っている飛行機が、もし、ハイジャックされたら、テロの道づれにされるより、闘ってみたいものだ、とわたしは考えていた。カミソリかナイフで乗客を殺すような残忍な男たちに対抗できるとは思わないが、何もせずに運命に身を委ねるより、立ち上がりたい。テロリストより乗客の人数の方が多いのだから、彼らをねじ伏せられる可能性もなくはない。最近、運動不足なので、テニスかジャズダンスを始めようと思っていたが、この際、格闘技を習った方が少しは役に立つだろう。わたしは乗客の話聞きながら、およそ愚にもつかないことを考えていた。

*瓦礫の下で生きている

夕方になってテレビはビル・クリントンを映し出した。娘のチェルシーと現場近くを視察している姿である。十一日、同時多発テロが起こった時、前大統領はオーストラリアを訪問中だった。昨日、グアム島を経て、軍用機で帰国したとい

う。

「わたしはここへ来て、犠牲者の家族と行方不明になっている人々の家族や友人に、心からの支持と追悼の意を表したいのです」

リラックスした調子で、コメントも台本なし。ニューヨークの間ではいまだに人気が高い。彼が立っていたのは、ウエスト・ブロードウェイの角で、通りに面したアラブ料理店の看板を指さしながら、こう言った。

「ここにはたくさんのお忠実なアラブ系アメリカ人がいる。あの看板を見ればよくわかるよ」

考えるまでもなくクリントンの八年間というのは、何と平和で好景気の時代だったことだろうか。彼はホワイトハウスから去り、頁がめくられたように、新しい陰惨な戦争という次の時代に入ってしまった。昨晚、オーバルオフィスでテレビ演説していたブッシュ大統領のあの情けない顔を思い出すと、彼はきつと裏ではこんなことを考えているに違いない、と思えてくるのだった。

「パパとパパの友達が出馬しろって言うものだから、その気になって大統領選に出てみたら、思いがけず勝ちまっつて……ぼくは、もともと大統領なんかになりたくなかったんだ」

昨年の大統領選挙の晩、十一月七日の深夜から八日の明け方にかけて、テレビの開票速報を見ていたわたしは、アメリカ合衆国の地図が共和党の赤と民主党の青に真っ二つに分断されるのを見つめていた。青は民主党の大票田ニューヨークをはじめとする東海岸とカリフォルニアなどの西海岸、その中間の州はほとんど赤である。

「ブッシュに投票したすべてのアメリカ人に責任を取って貰いたいものだわ」

わたしはひとりで怒鳴り始めた。

アル・ゴアが大統領になったとしても、十一日のテロに違いがあつたかどうかわからない。しかし、少なくともゴアだったらイスラエルとパレスチナの和平調停に力を尽そうとしただろう。ミサイル防衛網開発を強引に進め、弾道弾迎撃ミサイル（ABM）制限交渉を踏みにじり、包括的核実験禁止条約（CTBT）を死文化し、温暖化防止のための京都議定書からの離脱など、米国の利益をあらゆるさまに追求する「一国主義」を鮮明に打ち出すことなど、少なくとも、なかったはずだ。

米国がもう少し協調性を見せていたら、状況が変わつたかどうかかわからないが、わたしはこの事態を誰かのせいにして憤懣をぶつけたくなつたのである。

「少しは元気が出てきたようだね」

ピートが笑いながら声をかけてきた。

夜になって姉から電話がかかってきた。東京と電話連絡が取れたので少し元気が出たのかもしれない。

「どうも、瓦礫の下で十名ほど生き残っているらしい。ある女性が消防士に声をかけてきて、夫が瓦礫の下から携帯電話をかけてきたというんだ。他の九名も一緒らしい。救急隊もすっかり元気が出て、この天候のなか徹夜で捜索に励むそっだよ」

さつきから雷が鳴り始めていた。雨が降ってきて風が強くなったから、救急隊の作業も骨が折れるに違いない。わたしは締め切りの原稿を送ると、十名が無事明日の朝までに救出されることを祈りながら、ようやく眠りについた。雨脚が激しくなったのも気づかないほどだった。